FRaU

A City Where I Want To Live

photo AKIKO BABA　text & edit EMI FUKUSHIMA　cooperation IMABARI CITY

森と海が近いまち、今治に移り住む。

穏やかな瀬戸内海に瀬戸内しまなみ海道が伸び、
周囲には豊かな山々が広がる。
森と海がともに近く、産業も盛んな愛媛県今治市は、
近年、移住者が増えているのだそう。
新たな暮らしを求めてこの地に移り住んだ３組を訪ねた。

2025年１月に、北海道から大三島に移住した手塚実希さん、光一さん。愛犬と一緒にビーチを散歩するのが日課。「夕方には、美しい夕焼けも楽しめるんですよ」と実希さん。

北海道→今治市大三島
〈Pusai Coffee Roastery〉
手塚実希さん、光一さん

穏やかな海を望み、心地よいペースで暮らしをつくっていく

島らしい豊かな暮らしを心のままに享受する

「大三島での暮らしで嬉しいのは、海がすぐそばにあること。一日の終わりに車を走らせてビーチに行って、愛犬のハルちゃんと走ったり、夕日を眺めたりする。この時間が持てるだけで、つくづく移住してよかったなと思えるんですよね」

そう口を揃えるのが、手塚実希さん、光一さんご夫婦。2025年1月に北海道・札幌から移り住み、新たな暮らしを始めたばかりだ。光一さんは設計の仕事を生業とし、実希さんは、島の象徴ともいえる大山祇(おおやまづみ)神社の参道沿いに自家焙煎コーヒーと焼き菓子の店〈Pusai Coffee Roastery〉をオープン。観光客の多い繁忙期には夫婦揃って店に立つ。北海道で生まれ育った2人が移住を決めたのはおよそ3年前のこと。きっかけをもたらしたのは、実希さんが札幌で間借りで営んでいたカフェのお客さんだった。

「札幌と大三島の二拠点生活をしている方がいたんです。私たちは北国育ちなのに寒さが苦手で(笑)、以前から、いずれ暖かい土地で暮らしたいねと話していました。夫が独立を機に場所にとらわれずに仕事ができる状況になったことから現実味が増し、移住を具体的に検討するなかで、その方とお話して初めて大三島や瀬戸内の選択肢が浮上して。まずは視察がてら遊びに行きました」(実希)

何度か瀬戸内に足を運び、温暖な気候や穏やかな海、のどかな風景に惹かれた2人。複数の島を見て回ったが、選んだのは大三島。決め手は"人"だった。

「移住者が多く、横のつながりが強かったんですよね。カフェのお客さんを起点に、足を運ぶたびにいろんな人を紹介してもらえて、暮らしが想像しやすかったことは魅力でした。中心産業が農業の島だからか、島民の方も大らかで親切。程よい距離感も心地よかったです」

2つの物件との出会いも人とのつながりからもたらされたもの。1つが、自宅兼仕事場。牧歌的な集落に立つ約19坪の民家には、移住者の先輩でもある不動産屋の紹介で巡り合い、すぐにピンときた。

「仕事柄、移住するうえでも既存の建物を購入し、自分で手を加える前提でした。夫婦と犬1匹の暮らしなので広さは必要ないし、コンパクトなほうが内装に費用もかけられる。理想的でした」(光一)

もう1つが現在のコーヒースタンド。以前は塩屋だった古民家の一角を、現オーナーから借り受け、営んでいる。こちらをつないでくれたのも移住者の知り合い。移住3ヵ月後には、早くもオープンに漕ぎ着けた。「島内の物件には流動性がなく、いい場所を見つけるのに1年くらいかかるだろうと覚悟していました。移住後すぐに巡り会えたのは幸運でしたね」と光一さん。北海道にいた頃から自宅で、あるいは間借りで、と形態を変えながらカフェを続けてきた実希さんにとって、新天地で店を持つことは念願だった。「夫が健康上の都合でグルテンフリーの食生活をしていたことから、白砂糖や小麦粉、乳製品を極力使わない"ギルトフリー"な焼き菓子を研究していて。移住先でもまたそれらを出せる自分の店を持ちたいと考えていました。そして初めて訪れたときから大三島にはコーヒー屋があまりないのも気になっていて。本格的な一杯を提供できるようにとこれを機に焙煎を始めました」(実希)

移住から1年弱が経ち、ようやく地に足がついた暮らしを送り始めた2人。自分たちなりのペースも摑めてきた。

「大三島は豊かな自然が身近にあり、島らしい暮らしができる一方で、しまなみ海道のお陰で交通の便がよくて、四国や本州とも気軽に行き来ができるし、韓国や台湾などの海外にもアクセスしやすいんです。今はお客さんが多い週末にだけ店を開け、ときどき旅をしながら暮らしを楽しむことを大切にしています。行きたい場所が渋滞気味です(笑)」(光一)

1. 〈Pusai Coffee Roastery〉(愛媛県今治市大三島町宮浦5629)に立つ光一さん(左)と実希さん(右)。**2.** 目を惹く暖簾は、グラフィックデザイナーの小林一毅さんが手がけたもの。**3.** 自家焙煎のコーヒー豆は常時3、4種類が揃う。**4.** "ギルトフリー"を謳った身体に優しい焼き菓子が人気。**5.** 2人の自宅兼仕事場。「夫のデザインした家に住むのが夢だった」と実希さん。**6.** 古民家ならではの趣が漂う店内空間。テーブルの代わりの将棋盤も。

Imabari Favorite

大山祇神社　今治市大三島

日本神話に登場する大山津見神を祀る神社の総本社。甲冑を中心に、国宝や国の重要文化財の指定を受けた武具が数多く保管されており、大三島が"国宝の島"と呼ばれる由縁のひとつとなっている。「毎年10月頃に開催される産須奈大祭が圧巻でした。島内の各集落から獅子舞や山車が集まってきて、参加する島民たちの熱量も凄まじい。土地古来の文化を感じて、大三島がいっそう好きになりました」○愛媛県今治市大三島町宮浦3327

1. くろごま団地（愛媛県今治市常盤町2丁目1-20）は福地さん（左）の作業場も兼ねている。ご家族が立ち寄ることも。**2.** 15年ほど空き店舗になっていた衣料品店を改築。**3.** 元の店名“クロダ”に、小さくても力を秘めた“ごま”のイメージを重ねて名づけられた。**4.** 福地さん自らカフェ営業する日も。**5.** 最盛期は路面が見えないほどの人通りだった。**6.** 店内の什器や備品の多くは、取り壊し予定の建物や地域で出た不用品を譲り受けている。

Imabari Favorite

糸山公園　今治市小浦町

しまなみ海道の起点に位置する公園（展望台）。来島海峡と、全長4105 mの世界初の三連吊り橋として知られる来島海峡大橋の美しい眺めが堪能できる。「県外から友人や家族が遊びにきたら必ず連れていく場所。地元の人はもう見飽きたと言うんですが（笑）、このダイナミックな景色には、移住4年目を迎えても飽きることがありません。山道を数分登ったところにある展望台からの眺望はさらに圧巻です」〇愛媛県今治市小浦町2丁目5 / 入場無料 / 無休

埼玉県→今治市陸地部
〈リッケンファクトリーデザイン〉
福地立憲さん

新たな地に根を下ろし地域活動に携わる喜びに惹かれて

地域おこし協力隊として縁のなかった今治へ

今治港にほど近く、かつては地域の中心として栄えた今治銀座商店街。近年はシャッター街と化していた通りの一角に、今年9月、シェアキッチンや一棚本屋を内包する小さなコミュニティスペース「くろごま団地」が開業した。運営するのは〈リッケンファクトリーデザイン〉の福地立憲さん。地元の埼玉でデザイナーとして活躍しながら地域活性化にも携わり、2022年に今治へ移住した。

「埼玉では、昔ながらの商店街にデザイン事務所を構えていた縁から、定期的にものづくりを起点にしたマルシェなどのイベントを行っていました。地域と関わる面白さを実感するなかで、2018年に行政主催のまちづくりの集中プログラムに参加したのが転機になって。そこで出会った仲間と起業し、遊休資源を活用した地域活性化のより大きなプロジェクトに携わるようになったんです」

本業のデザインと同様の熱量でまちづくりにのめり込む一方、「いろんな土地に住んでみたい」という思いも温めていた。「再開発で事務所の立ち退きが必要になったことと結婚を機に、拠点を移すなら今かなと。調べるうちに地域おこし協力隊の存在を知り、地域活動に携わってきた自分にピッタリな制度だと感じました」

内陸県で生まれ育ち、漠然と海への憧れがあった。ゆえに照準を合わせたのは、以前夫婦で旅をした瀬戸内。だが今治に決めたのは「偶然だった」と福地さん。

「協力隊を募集している自治体をいくつかピックアップして、そのひとつが今治市でした。他よりも早いペースで選考が始まり、とんとん拍子で採用が決まって。コロナ禍だったこともあり、実際に足を運んだのは面接の日が初めてでした」

合わなければ別の土地へ移り住めばいい。気軽に夫婦で今治へやってきた福地さん。3年の任期が始まった。

「市役所の本庁への配属で中心部に住み始めたこともあり、近所にはコンビニもスーパーもある。多少は覚悟していた“地域特有の近所づき合い”の煩わしさもなく、生活面で大きなギャップはなかったですね。それでいて交通渋滞は少ないし、何度見ても来島海峡大橋の風景が美しい。多くのメリットも感じました」

仕事面で彼に課されたのは、中心市街地の活性化。「実情を調べると、音楽フェスを主催する人やアートプロジェクトを企画する人など、地域で面白い活動をする人がたくさんいた。そこで月に一度、そうしたキーマンを集めたトークイベントを始めました。参加者同士の交流が生まれ、僕自身も多くのつながりができた。今治で地域活動に携わるやりがいも感じられ、2年目には、腰を据えてこの土地に住もうと心が決まりました」

さまざまな面で今治と水が合った福地さん。今年3月の卒隊後もこの地に残り、デザイナー業の傍ら、協力隊時代に出会った元衣料品店の空き店舗を借り受け改築。「くろごま団地」の看板をかけた。

「埼玉での実践経験から、コミュニティスペースが地域活動の拠点になると感じ、今治にもそんな場所を作ろうと。そのうえでうまく機能させるためには、人に気軽に立ち寄ってもらえる場所であるのが重要。接点になりやすいのは飲食だと考え、月に2回から利用できるシェアキッチン『くろごまキッチン』を併設しました」

現在は店舗を持っていない、あるいは起業したばかりの飲食店オーナーが週3日ほど間借りで営業。また店内の本棚は一棚単位でスペースを貸し出し、小さな書店の開業を後押し。今後はイベントやセミナーなど、さまざまな地域活動の受け皿になっていくのだとか。「できる限り長く続けて、地域で新しいことを始める人を後押しし、コミュニティをつなぎ直す拠点になれば」。外の目線を携えながら、今治の魅力を発掘する。その活動から、地域の未来が育っていくことだろう。

1. フルリノベーションした古民家のリビングにて。趣ある建具などは既存のもの。この日次男は保育園へ。**2.** ボルダリングパネルに小窓にと仕掛けが満載の子供部屋。**3.** 緑豊かな庭で子供たちは木登りを習得。**4.** オフィススペースも広々。子供部屋とは階段でつながり、声がいつでも届く造りに。**5.** 玄関土間の天井は抜き、古民家特有の薄暗さを解消。**6.** 2人が制作する「今治経済新聞」のタブロイド版。地域の魅力を発掘するコンテンツを掲載。

Imabari Favorite

鈍川せせらぎ交流館　今治市玉川町

美肌などに効能があるとされる、今治市営の温泉施設。数種類の浴槽と露天風呂を完備するほか、昭和レトロな館内には駄菓子屋も併設。「週に一度は足を運ぶ日帰り温泉です。ぬるぬるしたアルカリ性単純泉の泉質が素晴らしくて、有名な道後温泉よりも個人的には好みです」〇愛媛県今治市玉川町鈍川甲218－1 / 10時30分～21時（20時30分札止め） / 大人（中学生以上）560円、小人（3歳～）280円 / 第2、第4月曜、12月31日、1月1日休

埼玉県→今治市陸地部
〈企画百貨〉
小林友紀さん、祐太さん

Uターン移住で得たゆとりある子育てと豊かな家族の時間

広々とした古民家で森と海と身近に暮らす

市街地からは車で15分ほど。小林友紀さん、祐太さんご夫婦は、みかん畑に囲まれた山間部の一角で、5歳と7歳の息子さんとともに4人家族で日々を送っている。住まいとしたのは、広々とした庭に立つ築70年超の日本家屋。昔ながらの趣を残してリノベーションし、床面積180㎡の中にはゆったりとしたリビングや子供部屋、2人が立ち上げたPR会社〈企画百貨〉の事務所も確保。公私にわたる暮らしの拠点としている。

「重視したのは広さです。やんちゃ盛りの子供たちがいると、遊ぶにも荷物の整理にも、スペースが必要で。都会ではできないようなのびのびとした子育て環境を求めて今治に移住したので、譲れない点でした。そのうえで、私自身が学生時代に建築を学んでいたこともあり、木と漆喰の伝統的な家への憧れがあったんです。10軒以上を見て回り、ようやく見つけたのが今の場所です」（友紀）

友紀さんは今治、祐太さんは岡山・倉敷の出身。瀬戸内エリアにはかねて縁があった2人だが、移住前はともに都内のPR会社に勤務。埼玉に住み、都心にラッシュ通勤する日々だった。変化したのはコロナ禍。2020年の第2子出産がターニングポイントになった。

「里帰り出産をして埼玉に戻ると、すぐに緊急事態宣言が発令されました。保育園も休みになり、どこへも出かけられない状況のなかで、狭い家や不自由な環境で0歳と1歳の子供を抱えることに不安を感じたんです。結婚当初から夫婦では、子育てがひと段落した後やリタイア後に瀬戸内に戻りたいねと話していたんですが、冷静に考えると、むしろ子育て期間中に地方に身を置くことでプラスになることも多いのかもしれないなと。自然と移住に心が決まっていきました。リモートワークが定着したことも、首都圏を離れる決心を後押ししましたね」（友紀）

“いずれ”が“今しかない”に変わると、行動は早かった。家族や友人のサポートを受けやすいという理由で移住先を地元・今治に決めると、同年9月にはいったん一家で友紀さんの実家へ。家探しと職探しに着手する。「東京の仕事をフルリモートで続けることもできたんですが、新しい土地に来たからには仕事を通じて人脈を広げ、その地域に根づき、次につながる経験を積みたかった」とは祐太さん。前職の経験を活かして、祐太さんは松山市の印刷会社に、友紀さんは今治で地域のフリーマガジンを制作する会社に転職。暮らしの基盤を作っていった。それぞれのタイミングで独立すると、2023年には夫婦で起業。現在は〈企画百貨〉として他に2人のスタッフを抱え、地域メディア「今治経済新聞」の運営や昨年開校した「FC今治高校」の広報業務を担うなどキャリアアップを続けている。

移住から5年が経ち、子供たちもすくすく成長。その過程では、ことあるごとに子育て環境の豊かさを感じてきたそう。

「今治では、身近な自然がそのまま遊び場になるのが嬉しいですね。都会では、遊園地や遊び場はあっても有料だし、事前に予約をしておかないといけない場所も多い。やっぱりどこに行くにも何をするにもお金と時間がかかっていました。でも今は、車で10分も走れば海や山があり、無料のキャンプ場も多い。日常の動線上に、多くの人が遠くからわざわざ足を運ぶような豊かな環境があることは、何よりの魅力だなと感じます」（友紀）

最近は、軽のキャンピングカーを購入したという小林一家。これからますます、休日や余暇の時間が豊かになりそうだ。

「近くのキャンプ場に1台で行って、夜に星を眺めたり、そのまま車中泊をしたりするのが最近の楽しみですね。自然の中で時間を過ごすと、やっぱり学びも多い。子供たちも、日に日にたくましくなっているなと実感しています」（友紀）

いまばり暮らし

今治市移住・定住・交流ポータルサイト

今治市への移住（転入）・就職等の情報を掲載しています。